もふもふと異世界でスローライフを目指します！

Mofumofu to Isekai de Slowlife wo Mezashi masu!

4

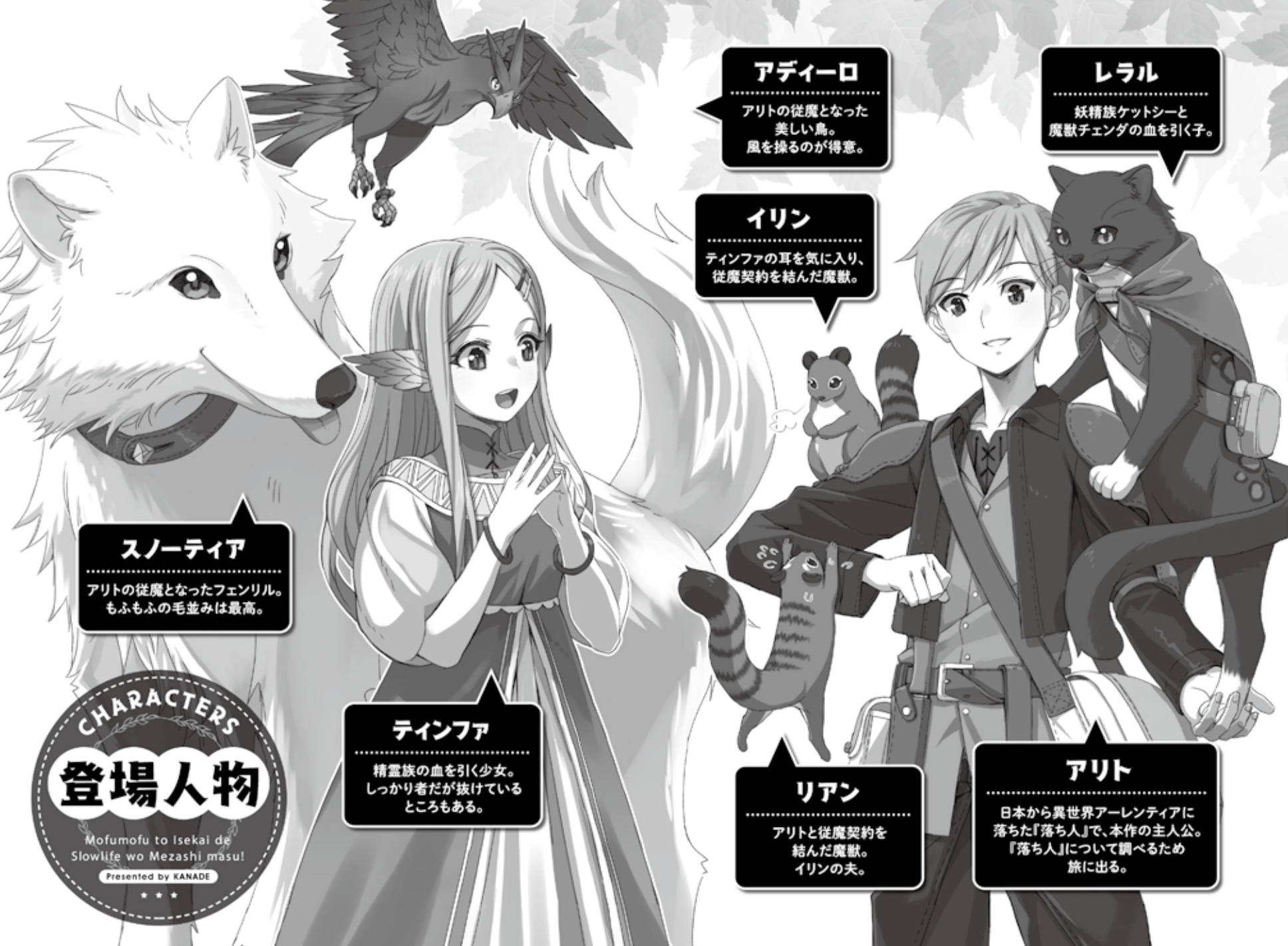
★★★

カナデ

Kanade

目次

第一章　森の集落の人々　7
第二章　旅の先に見えるもの　159
番外編　果ての間に　267


CHARACTERS
登場人物
Mofumofu to Isekai de Slowlife wo Mezashi masu!
Presented by KANADE
アディーロ
アリトの従魔となった美しい鳥。風を操るのが得意。
レラル
妖精族ケットシーと魔獣チェンダの血を引く子。
イリン
ティンファの耳を気に入り、従魔契約を結んだ魔獣。
スノーティア
アリトの従魔となったフェンリル。もふもふの毛並みは最高。
ティンファ
精霊族の血を引く少女。しっかり者だが抜けているところもある。
リアン
アリトと従魔契約を結んだ魔獣。イリンの夫。
アリト
日本から異世界アーレンティアに落ちた『落ち人』で、本作の主人公。『落ち人』について調べるため旅に出る。

第一章　森の集落の人々

第一話　深い森

日本からアーレンティアという異世界に落ちてきた『落ち人』の俺――日比野有仁（ひびのありひと）は、北の辺境地を目指して旅をしている。

落ちてきた際にこの世界に適した身体に変換されたらしく、二十八歳だった俺は髪色や顔などが変わり、今の見た目は十三歳程度の少年だ。

『死の森』に落ちてハイ・エルフのオースト爺（じい）さんに助けられた俺は、森で二年ちょっと暮らしても背が伸びず、成長しないことに不安を感じた。

そこで、自分と同じようにこの世界へ来た『落ち人』について調べるために、従魔となってくれたフェンリルのスノーティアと、ウィラールのアディーロとともに旅立ったのだ。

『落ち人』に関する情報は少なかったが、調べていくうちに過去に倉持匠（くらもちたくみ）さんという『落ち人』がいたことがわかり、彼の残した手記を見ることができた。

その手記に『落ち人』の手がかりは北の果てにあると書かれていたため、俺も北へ向かうことにした、というわけだ。
道中、妖精族ケットシーと魔獣チェンダの間に生まれたレラルや、精霊族の血を引くティンファ、さらにはリスに似た魔獣のリアンとイリンが仲間に加わり、大分賑やかになった。
エリダナの街を出発し、広大な森の中を奥へ奥へと進む旅は、今のところ順調だ。
リアンとイリンがティンファのそばで周囲を警戒し、危険が迫れば逃げるよう誘導してくれるので、移動や魔物との戦闘がかなり楽になった。
今のところは魔物の不意打ちの気配も察知し、敵が近づく前に余裕を持って移動することができている。
これには、とてもほっとした。背後をさほど気遣う必要がなくなり、戦闘に集中できる。
ティンファと契約を結んでくれたイリンには感謝だ。
さらにリアンとイリンは魔法を使って木の実の採取もしてくれるので、とても助かっている。
『アリト、右前方から魔物が来るの』
俺のそばを進むスノーティア――スノーから警告が入った。
『左にもいるぞ。まだ距離はあるがな』
今度は空を飛んでいるアディーロ――アディーからだ。
警戒しながら慎重に森を進んで一週間が経ったが、魔物の襲撃回数はどんどん増えている。

俺は念話で伝えられたスノーとアディーの警告をティンファに知らせた。
「ティンファ、魔物が来るから」
「はい」
すぐさま戦闘準備に入り、周囲を見回して戦闘に適した場所へと急ぎ移動する。
ティンファはレラルとイリンに任せて下がらせ、太い木の下で気配を殺して待機してもらう。
俺とスノーは、前に出て敵を待ち構えていた。
ほどなくして前方から石が蹴り飛ばされてくると、俺は避けると同時に、後ろのティンファたちに当たらないよう風魔法を使って軌道を変える。
その間に、スノーは風魔法で邪魔な枝を切り裂いて視界を開いてくれた。
俺は獣の魔物の姿を確認し、すぐさま矢を射た。追い風を纏わせて飛んだ一射目が命中したかどうかを確認することなく、次々と連続で矢を放つ。
最初の矢は外れたようだが、二番目の矢は蛇行しながら走り寄る魔物の身体に刺さった。
その矢で動きが止まった一瞬の隙に、スノーの放った風の刃が襲い掛かる。
魔物が倒れたのを確認してから、俺は周囲の気配を探った。
『スノー、他にこちらを襲ってきそうな気配はあるか？　アディーがさっき言っていた左の方の魔物は？』
『んー？　他は今ので逃げていったの。左のはまだ遠いよ』

『じゃあ急いで解体しちゃうから、魔物が近づいてきたらお願いな』
スノーの風の刃で切り裂かれて絶命した魔物を、手早く解体する。
この旅路はずっと森の中で、常に危険と隣り合わせだ。だからその場で解体できる時には、魔法を使って手早く済ませてしまう。
まず風で周囲を覆い、血の匂いで他の魔物が引き寄せられるのを防ぐ。
次に浄化魔法をかけながら血抜きし、腹を切り裂いて内臓を取り出したら、一気に風を使って皮を剥いだ。
骨を外すのは後にして、肉をカバンに入る大きさにブツ切りにし、それと皮に浄化魔法をかけて収納したら終わりだ。
解体している間に、魔物の襲撃を受けることはなかった。
最後に念入りに浄化で地面の血の痕を消してから、移動を再開する。
ちなみに今襲ってきた魔物は中級だったらしく、俺とスノーを見るリアンとイリンの目がキラキラしていた。「強い敵を難なく倒せる、凄い！」ということらしい。
今のところは、戦闘になってもスノーとアディーのおかげで問題なく対処できている。
大勢に囲まれて一斉に襲われるなど、よほどの事態にならない限りは大丈夫だ。
そんな事態も、アディーが空から偵察してくれているので起こるはずがない。
アディーが俺の修業のためにわざと襲撃を教えないのであればありえるかもしれないが、ティンファが一緒の今はその心配もないだろうしな。
『アリト。左の魔物、オークだな。少し後を追ってみたら奴らの集落があった。それと集落を見張るいくつかの人影もあったが、どうする？』
オークがこんな森の奥に集落を作るなんて……。人里近くにあることが多いって聞いたけどな。
でもそれを見張る人がいるってことは、近くに人が住んでいるのか。エルフの集落がこの近くにあるのかな？
『……なあアディー。この周辺に、見張りの人が住むような集落はありそうか？』
『どうだかな。まあ、探るのはいいが。集落へ行く前に、見張りをする者たちに会ったほうがよいのではないか？』
確かにいきなりこんな森の奥にある集落に行ったら、驚いて警戒されるか。エリダナの街を造った英雄キーリエフさん――オースト爺さんの古くからの友人でもある――の名前を出せば大丈夫な気はするけど……。
でもアディーが言うように、やはり見張っている人たちに合流したほうがよさそうだな。
『わかった。じゃあそこまで誘導してくれ』
そう念話で答えたあと、ティンファの方に向き直る。
「ティンファ、皆。この先にオークの集落と、恐らくこの辺りに住んでいるであろう人たちの姿があるってアディーが教えてくれたんだ。その人たちに合流しようと思うんだけど、いいかな」

「オークの集落が……。はい、わかりました」
ティンファや皆の承諾を得て、そのままアディーの先導に従い急いで向かうと、もうすぐ合流、というところで誰何の声が掛かった。
「誰だ!! こんな場所で何をしている」
近くの木の上に人がいるのは察知していたので、その声に素直に止まって答える。
「すみません、俺たちは旅の者です。北の辺境地まで、アルブレド帝国を避けて移動しています。人の気配がしたので、気になって来ました」
「北の辺境地まで? なんでそんな場所へ……。まあアルブレド帝国を避けるのはわかるが。ともかく、そこを動かないでくれ。こちらから向かう」
「はい」
木から下りて、他の人を呼びに行ったらしい。
気配を見送った俺は、横に座ってもらったスノーの背に手を置いてその場で待つ。
『二人いるの。敵意は……ない、かな? でもこっちをかなり警戒しているの』
『ありがとう、スノー。そのままちょっと大人しくしていてな』
そうして待っていると、木々の間から二人の男性エルフがこちらへ歩いてきた。
足音や気配がほとんどしないのは、さすが森で暮らすエルフ、といったところか。
背が高く、恐らく俺の頭がやっと胸元に届くくらいだろう。一人は薄い緑の髪、もう一人は金髪の、スラっと引き締まった身体つきのエルフの戦士たちだった。
「……子供と女、か? ああ、でも従魔の数が多いな。しかもかなりの強さ、か……。すまん。こんな場所で人に会うことなど、ほとんどないからな」
薄い緑の髪のエルフが、こちらを見定めるように言った。
「いいえ。警戒するのは当然だと思います。俺たちの身元に不安があるようでしたら、エリダナの街のキーリエフ・エルデ・エリダナート様へお問い合わせください。旅に出る前は屋敷で世話になっていましたから」
遠く距離をとって俺たちを見る二人にそう告げると、彼らは目を見張った。
「!? キーリエフ様の! 失礼した。しかし、旅の者が私たちに何の用だ?」
「俺の従魔が、この先にオークの集落があると教えてくれました。アディー、ちょっと降りてきてくれ」
空へ声を掛けると、すぐに羽音とともに舞い降りてきたアディーがスノーの頭へとまる。
美しい尾羽を舞うようになびかせ、鮮やかな色彩の翼を羽ばたかせて降りてきた姿に、二人とも目を奪われていた。
「も、もしかしてウィラールかっ!?」
すると、黙って警戒していた金髪のエルフの人が驚きの声を上げ、呆然とアディーを見つめる。
アディーは姿をかなり小さく変えているのに、ティンファもすぐに種族を見抜いた。ウィラール

の特徴を知っている人が見たら、一発なんだな。
まあ、森に住むエルフなら、アディーの正体を知っても捕獲しようとはしないだろうけど。
「はい。俺にはもったいない従魔たちです。このウィラールのアディーがオークの集落を見つけてくれたのですが、もし必要なら討伐に協力したいと思いまして。あ、すみません。自己紹介がまだでしたね。俺はアリトと言います。後ろの子はティンファです。まだ成人前なので俺自身はたいして戦力にはなりませんが、従魔たちは頼りになりますよ」
ゴブリンとオークの集落は、見つけたら殲滅するか、冒険者ギルドに通報するのが原則だ。奴らは人を襲うため、近くに人里があるならなおさら早く対処しないといけない。
俺ではそれほど多く倒せないので、殲滅する場合にはほぼスノーとアディーに頼ることになる。だから、近くに人の集落がなければ、ひとまずこのままオークを見逃していたかもしれない。
でも、集落があるのなら話は別だ。もしこの人たちの集落で殲滅を検討しているのなら、力になりたい。
「……すまない。俺たちはこの近くにある集落に住んでいる。俺はエティー、後ろはジリオスだ。討伐に協力してくれるなら助かる。急ぎの旅でなければ、ぜひ集落に寄っていってくれ」
薄い緑髪のエルフ――エティーさんがそう言って微笑む。
「ティンファ、彼らの集落に寄ってオークの殲滅に協力してもいいかな？」
「はい、それでいいです。……私では力になれませんが、オークの集落は殲滅しないといけないですから」
後ろを振り返って確認すると、ティンファがこちらを真っすぐに見て頷いた。
久しぶりの、人型の魔物との戦いだ。
……ティンファが襲われていたら、俺は相手が人でも立ち向かえるかな。
まだ人を殺すことも、人型の魔物を殺すのにも嫌悪感はある。だけど守るために必要なら躊躇うべきではない。迷った分だけ、大切な人たちが害されることになる。
そのことを、ティンファを背に庇い旅をしてきて、やっと実感できたのだ。
エリダナの街までの旅では、冒険者のリナさんに精神的に甘えていた部分があったのだろうと今では思う。
まあ、俺はとんだへたれ野郎だって自覚もあるしな。大切な人を守る覚悟を決めたとはいえ、実際に盗賊にあった時、迷わず弓を射ることができるか、といったら別だろうし。
でも、ゴブリンやオークを殲滅することに対しては、やらなければならないことだと踏ん切りがついたから。
「すまない、助かる。では、案内するからついてきてくれ」
エティーさんに促され、俺は頷いた。
「はい。道中の警戒はアディーとこのスノーがしてくれますので、魔物を察知したらお伝えします」

「ありがたい。こっちだ」
エティーさんとジリオスさんの後について西へ歩いていくと、それほど時間が経たないうちに、森の中にひっそりとある集落が見えてきた。
最初はそれが集落だとは気づかなかった。エルフの家は木の上に建てられるとエリダナの街で知ったというのに、木々を見上げてやっとそこが集落だと気づいたのだ。
今いる森の木々は、エリダナの街のように、見上げても天辺（てっぺん）が見えないほど高いわけではないが、葉の生い茂る枝が密集して生えていた。
その隣り合った木の枝と枝が重なり合った中程に、足場を組んで家を建ててある。屋根の上にも枝葉が生い茂っているので、空からでも一見集落があるとはわからないだろう。
それは、まさに自然と共存している光景だった。
「凄い……。ここが昔からのエルフの集落、か」
キーリエフさんの話では、エルフの起源は霊山で、そこから麓（ふもと）の森、最近ではさらに街へと移動する者が増えているとのことだった。
「ふふふ。今では街へ出ていく者も多いのだがな。まあ、でもたまには戻ってくる者もいるから、なんとか集落を維持できているんだ。住民はエルフだけじゃなく、戻ってきた者の中には他種族との間に生まれた者もいるし、妖精族や獣人もいる。では集会所へ案内しよう」
ポカンと口を開いて呆然と見上げていたからか、ジリオスさんが微笑んで声を掛けてくれた。

こっちだ、と案内されて、木の陰にあった階段を上る。
恐らくわざと斜めに木を植えたのだろう。交差した枝を土台に板が敷かれ、その上に小さめの一戸建ての集会所と広場があった。
「ここで待っていてくれ。長（おさ）を連れてくる」
エティーさんはそう言い、ジリオスさんとともに建物の中に入っていった。
広場に残された俺たちが周囲を見回していると、あちこちから顔を出している人たちと目が合った。
エルフに獣人の特徴がある人、それに恐らく成人なのに俺より背が低い人もいる。きっと妖精族だろう。
ジリオスさんが言っていた通り、多種多様な種族が暮らしているようだ。
『なんかたくさん見られているの。敵意はないけど、すっごく視線を感じるの』
こんな森の中の集落に旅人が来るなんて滅多にないだろうから、外の人が珍しいのかもしれない。それにスノーやレラルに、リアンとイリンもいるしな。
スノーには、今は一番小さい姿になってもらっている。大きいままだと、木の上の通路を通れるか、重さで通路が壊れないかなど不安だったからだ。
小さくなるのを見て、エティーさんとジリオスさんはとても驚いていた。
そういえば、アディーを見てウィラールだと気づく人は何人かいたけど、スノーを一目でフェン

リルと見破る人はほとんどいなかったよな。
「ここは素朴な感じがしていいですね。村を思い出してしまいます」
ティンファの家は、山の麓から少し登った場所にあった。ここと同じく自然の中にある集落だから、懐かしくなったのだろうか。
エリダナに住む、ティンファのお祖母さんであるファーラさんの家は森の中にあるとはいえ、森自体が街だったから、かなり活気があったしな。
「オースト爺さんの家は、もっと深い森の中にあったなぁ。やっぱり魔力濃度の違いがあるからか、あの森とは空気が違うけど、街中よりもここのほうが俺も落ち着くよ」
旅に出る前は、『死の森』とオウル村にしか行かなかったから、あまり意識してなかったのだが。こうやって深い森の中にいると、『死の森』が異常なほど魔力濃度の高い、まさしく辺境だったのだと実感できる。こう、なんというか空気の密度が違うのだ。
「そうですよね。街中よりもスノーちゃんもレラルちゃんも生き生きしていますし。住むなら街よりも、こういう自然の中にあるようなところがいいですよね。街は便利だし、何でも買えますけど」
そう言って笑ったティンファを見て、つい「この旅が終わればティンファと一緒に住むのか」、とか余計なことを考えてしまい顔が熱くなる。
でもこうやって、ティンファが俺と同じように感じてくれるのはうれしいな。

周囲の視線を忘れて、のんびりとスノーの頭を撫でてしまったのだった。

第二話　オーク集落討伐へ

「貴方様方がオークの集落を殲滅するのに協力してくださる、と？」
戻ってきたエティーさんに呼ばれて集会所の中に入ると、長く伸びた白髪に白い髭を蓄えた、ダルーシさんというエルフの長老を紹介された。
外見はオースト爺さんよりもかなり年老いていて、八十歳は超えているように見える。まあ、実年齢はオースト爺さんのほうがずっと上なのだろうけどな。
「はい。俺の従魔たちは見た目通りとても強いのですが、俺と彼女は普段から戦闘をしているわけではありません。だから俺たちだけならオークの集落を見つけても殲滅はせずに、通り過ぎたと思います。でもエティーさんとジリオスさんを見つけて、近くに人里があることがわかったので。協力できることなら協力します。人里に近いゴブリンとオークの集落は、殲滅しないといけませんから」
そう話す俺の横で、イリンを抱きしめながらティンファも頷いていた。
「俺たちは北の辺境地へ向かって旅をしていますが、急ぎではないので、他にも何かお手伝いでき

ることがあれば言ってください」
討伐以外の手伝いを申し出たのは、集会所にいつの間にか集まっていた人たちの中に、体格のいい男性をあまり見なかったせいだ。
集落の男性は妖精族の血が濃いのか、俺よりも小柄な人がほとんどだった。もちろんエルフもいるが、小さな子供や女性が多いように見える。
「貴方たちはなぜそこまで言ってくださるのか？」
「旅に出る前は、しばらくエリダナの街のキーリエフ様の屋敷でお世話になっていまして、キーリエフ様から『集落に行くことがあったらよろしく』と言われています。それに倒したオークの肉は、きちんと貰うつもりですよ？」
ただ自分がそうしたいと思ったと言うだけでは、あまり説得力がないだろうと考え、キーリエフさんのことを出してみた。
俺はこの世界に来てから、様々な人たちに助けてもらっている。だから、俺にできることで少しでも恩を返したいと思うのだ。
「……ふう。若い衆は街へ出ていく者が多くてですな。集落に残っている若い衆は今、あいにく王都まで買い出しに出ております。魔法を使える者は多くても、オークの集落を殲滅するには戦力不足でしょう。だからその申し出は、我々にはとても助かります」
買い出しに、か。だから男性が少なかったのだな。……エルフの長老が言う若い衆が、どのくらいの年齢の人かはわからないけど。
エティーさんは長老の言葉に頷き、補足する。
「俺たちが偵察に出て、買い出しに行った者たちが戻ってくるのを待っていたところだ。だが、思ったよりもオークの集落の規模が大きくてな。ちょうど今日は、あそこでジリオスと偵察がてら王都か街へ助けを呼びに行こうかと相談していたところだったのだ」
アディーからは、オークの集落には小屋が何軒もあり、かなりの規模だと報告を受けている。
「オークに気づかれたら、いつこの集落が襲撃されるかわからないですよね。それほど離れていませんし」
「ああ。今までは狩りに出た時に、調達係のオークに何度か出くわすくらいだったのだが……。やはり早いうちに殲滅できるなら、それに越したことはない」
エルフや妖精族は、木と親和性が高い。だから森の中でオーク一体と出会うくらいなら、恐らくなんとかやりすごせるのだろう。でも集団で襲ってくるとなると話は別だ。
いくらこの集落が木の上にあるといっても、力ずくで木を倒されたりしたら目も当てられない。
「先ほど言ったように、俺と彼女はほぼ戦力になりません。でも、俺の従魔なら、きっとお役に立てると思います」
そう言ってから俺はスノーに視線を向けて、念話を送る。
『スノー、ごめんな。ちょっとオークの集落の殲滅に、力を貸してくれ。それと、アディーも。俺

たちが危なくなったら少し助けてくれないか』
『うん、いいよ！　スノー、頑張るの』
『フン。あの規模なら仕方ないな。様子を見ながら手を貸してやる』
『ありがとうな』
思わず笑みがこぼれそうになる。本当に、俺にはもったいない仲間、だよな。
「それは……ありがたいことです。では、あまり旅の足止めをしてもいけませんから、夕食の時に打ち合わせをして、明日にでも様子を見て大丈夫そうなら決行、ということでどうでしょうか」
「はい、それでいいです」
長老の言葉に頷くと、それから夕食までは寄ってくる子供たちの相手をしながら、集落を見学させてもらった。
子供たちには、エリダナの街の様子やナブリア国のことなど、外のことを聞かれた。
この子供たちも大きくなった時、ここに残るか出ていくかを選ぶことになるのだろう。
そう思うと、エリダナの街で別れて故郷へ帰ったエルフのリナさんのことを思い出す。
日が暮れて、皆で夕食を食べた後に、戦闘ができる人たちだけ残って打ち合わせをした。
戦えるのは、魔法が得意な妖精族との混血の人と、普段から狩りをしている人たちだ。
それが終わると、集会所の宿泊用の部屋に泊めてもらい、眠りについた。

◆　◆　◆

翌朝、エティーさんたちの集落で暮らす十人と俺たちで、オークの集落に向かった。
ティンファは集会所でレラルとイリンと一緒に待っている。リアンにはオークの集落の偵察を頼むために一緒に来てもらった。
同行している集落の人で従魔と契約をしているのは、普段狩りをしているジリオスさんたち以外では二人だけ。
リアンくらいの小型のネズミのような魔獣と、アディーよりも小さな鳥型の魔獣だ。
アディーによると、恐らくリアンとイリンよりも弱いだろうとのことで、どちらも狩りでの偵察役を務めているらしい。
一行はアディーの先導で進み、リアンとネズミ型の従魔の子が先行して集落の偵察をすることになった。
まずは、集落の外に出ていた、食料の調達部隊らしき数体のオークを撃破した。それを二度ほど繰り返し、合計六体のオークを倒す。
倒したオークは集落のオークたちに気づかれる前に、さっと穴を掘って埋めて処置をした。
偵察の結果、現在集落にいるオークは四十程度であるとわかり、そのまま予定通りに殲滅戦を決行することになった。

作戦では、まずは弓と魔法で攻撃し、集落から出てきたオークを遠距離から倒すことになっている。
オークの集落を囲めるほどの人員がおらず、弓と魔法が得意な人がほとんどだったため、距離を取りながら戦えるこのやり方はぴったりだ。
相手が撤退に転じた後の追撃戦は、スノーとアディーに頼ることになるかもしれないな。情けないけど、俺も頑張ろう。
リアンには、予(あらかじ)めオークの集落から俺たちの潜んでいる場所までの間に、魔法で落とし穴を何箇所か掘ってもらった。
オークの身体が落ちて戦闘不能になるほどの穴は無理でも、足首が入るくらいの大きさがあればいい。そこに誘導して転ばせれば、楽にとどめを刺すことができるだろう。
スノーには、俺たちが処理しきれなくなった敵を倒してもらう。
遠距離から攻撃してくる敵がいた場合には、空からアディーの判断で対処してもらうように頼んだ。
皆の安全を考えれば、スノーとアディーを前面に出して戦ったほうがいいのだが、それは今回の討伐隊の面々に不要だと言われた。
自分たちの手で、できるだけのことをやる。それが街の外で暮らす者たちの鉄則なのだ。
「では行くぞ」

この殲滅戦のリーダーであるエティーさんの合図で、一斉に魔法が放たれる。
俺も合図に合わせ、弓で戦うのに邪魔な木の枝を風の刃で切り裂いた。
放たれた火の魔法でオークの集落入り口近くの小屋に火がつき、気づいたオークが小屋から出てきて大騒ぎになる。
討伐隊の魔法は次々と放たれており、それをかいくぐってこちらに近づいてきたオークを、待ち構えていた弓で狙い撃った。
作戦通りに戦闘は進み、向かってくるオークがいなくなったところで、今度は俺たちが集落へ前進する。
ここまでは特に被害はなく、直接戦ったのもエティーさんだけで、順調だ。
アディーとリアンの偵察で、残りは小屋に取り残された子供のオークや、俺たちがいるのとは逆方向に逃げようとしているオークだけだとわかった。
そのことを俺が報告すると、討伐隊の半分は小屋に当たり、残りの半数と俺は集落の外に逃げようとするオークを弓と魔法で狙うことになった。
早速、俺は一気に集落へ近づいていく。ここまで来て逃がすわけにはいかない。逃げたオークは、どこかで人を襲うかもしれないのだから。
魔法による火は、小屋と小屋が離れているからか、燃え広がることなく消し止められていた。
スノーには小屋の中に潜んでいるオークの対処をお願いし、俺は弓を構えながら集落の周囲を

歩く。
そうしてあちこちから聞こえていた音も静まり、戦いはほぼ終わっただろうと思われた時。
『アリトッ!?』
ふいに聞こえたスノーの警告で、咄嗟に横へ飛んで地面に伏せる。
それと同時に、俺が元いた場所に矢が突き立った。
弓を使えるオークがいるのかっ!!
戦いは終わったとばかり思い、集落の中のオークの屍に注意が向き、警戒が緩んでしまっていた。
危なかったな。
地面を転がりながら周囲の気配を探ると、奥の小屋の屋根に弓を構えたオークの姿があった。
その姿を捉えた瞬間、俺は魔法を発動し風の刃を放つ。
それを察知したオークは、よけようとして体勢を崩し屋根から転がり落ちた。
その後、スノーがオークに咬みついたのを見て、俺は強張った身体から力を抜く。
瞬時に風魔法を発現できるようになったのは、アディーの修業のお蔭だな。
そんなことを考えていると、叱責の念話が頭にガンガンと響いた。
『緊張感が足りんと何度言ったらわかるんだ!? さっさと立って警戒しろ!! 森の中で気を緩めるなっ!!』
その言葉で瞬時に立ち上がり、上空からの冷気を感じながら警戒の意識を周囲に巡らす。

おう……やはりアディーに怒られてしまった。最近のアディーは、ツン要素よりもデレ要素のほうが多かったのに。まあ、今のは俺が悪いんだけどさ。
『そうなの！ アリト、危ないの！』
『あ、ああ。ごめんな、スノー。ありがとうな』
とりあえずこれ以上お叱りを受けないように、スノーと周囲の気配を探って警戒していると、しばらくして逃げたオークを追っていった人たちが戻ってくるのが見えた。
「おーい、終わったぞ。恐らく逃したオークはいないだろう。すまんが、一応周囲を偵察してきてもらってもいいか？」
「はい、わかりました。頼んでみます」
俺はアディーに念話を送る。
『アディー。ここら一帯にオークが潜んでいないか、見回ってくれるか？』
『……ふう。行ってくる』
その沈黙が怖い！ 間違いなく修業が厳しくなるな……。が、頑張ろう。
それから集落の小屋を全て焼き払い、オークを解体し、全部終わった頃にアディーが戻ってきた。
大分広範囲を見てきたそうだが、オークの姿はないとのことだったので、作戦は終了した。
引き上げる際、オークを何体か貰って肉をカバンに保管した。
エティーさんたちの集落でもできるだけオークの肉が欲しいということだったので、手持ちのマ

ジックバッグを一つ、肉の運搬用に提供する。
渡す際に「キーリエフ様が作ったものです」と言ったのは、トラブルを避けるために名前を使ってもいいと、エリダナの街を出る時に本人から許可を貰っているからだ。
エティーさんによれば、必要な物を買いに街へ行く時には、大人数で森の中を警戒しながら荷車を押していくとのこと。こういう人たちにこそ、マジックバッグは必要だろう。
結局、このオーク殲滅作戦では、前に出すぎた狩人の若者が軽い怪我をしたが、それ以外は全員無事だ。
怪我の治療は、ズーリーという同行者の中で唯一の女性が行った。
治療の様子が気になって見ていたのだが、ズーリーはそんな俺の行動を不思議に思ったらしい。質問されたので俺は薬師見習いだと答えると、薬草の話で盛り上がった。
そうして集落に戻った後は、祝いの宴が開かれた。

ジューという音とともに、肉の焼けるいい匂いが辺りに漂う。
「あんたが焼いた肉、凄く美味しいなぁ！　その味付けの仕方、あとで教えてくれないか？」
「ええ、いいですよ。手に入りにくい調味料を使っているので、今ある材料で似たような味付けになる方法を教えますね」
オークを殲滅して戻ってくると、エティーさん達の集落の人たちが集まってねぎらいの言葉を掛けてくれた。
ティンファも俺たちの無事を確認して、ホッとした顔をしていたよ。
そんな彼女の顔を見て、今の俺には心配してくれる人がいるのだと思い、くすぐったいような感じがしつつもうれしくなってしまった。
オースト爺さんは見守ってくれている、って感じだったからな！
持ち帰った大量の肉で宴は焼肉パーティーになり、俺は率先して料理をしていた。
戦いで活躍できたわけではないし、料理をするのは好きなので、俺にできることをしたいと思ったのだ。
広場の隅で調理器具を広げて肉を仕込んでいると、そんな俺をティンファは笑い、一緒に手伝ってくれる。
作ったのは、薄切りにしたオークの肉を、果物の搾り汁に漬け込んで焼いたものと、街で大量に買っておいた野菜と採取した野草たっぷりのスープだ。焼肉の味付けは、シオガを使った醤油風味のタレと、塩と胡椒（こしょう）の二種類を用意した。
テーブルの上に置いた魔道具のコンロで俺が肉を焼き、ティンファはその肉やスープを皿によそって振る舞ってくれている。
「塩味のも、他の調味料の味のもとても美味しいよ。オーク討伐に協力してもらったのに、料理までありがとうな」

立ち読みサンプル
はここまで

「いえいえ。料理は趣味みたいなものですから」
肉を食べながら次々と声を掛けてくれる集落の人たちに、俺はそんな言葉を返していく。
美味しいと笑顔で食べてもらうのがこんなにもうれしいことなのだと、この世界に来て初めて気づいた。
これが『幸せ』というものだと実感する。日本では抱くことのなかった感情を一つ一つ知るたびに、いかに自分が孤独だったのかも思い知るのだ。
「クスクス。本当にアリトさんは、どこに行っても料理していますものね」
隣でそう言いながら笑うティンファの耳の羽が揺れた。
ティンファは森に入ってからは、ずっと帽子をかぶっていない。エティーさんとジリオスさんと接触した時もそのままだった。
耳を出した今のありのままのティンファは、エリダナの街にいる時よりも、ずっとのびのびとしているように見える。
「あ、イリン。ダメよ、今お肉焼いているとこだから。ふふふ、くすぐったいわ。なあに？　食べたいの？」
ティンファの背を駆け上がって肩に乗ったイリンが、羽の耳と頬にすり寄った。
イリンはティンファの耳を気に入って契約すると言っていたからな。
歩いている時も、俺が偵察を頼まなければ、ずっとティンファの肩に乗っている。